

愛媛

頼れるドクター

おかげさまで

5周年

スペシャルインタビュー

元サッカー日本代表
中村 憲剛

巻頭記事

血を巡らせ、血を増やす
血力アップを始めよう!

巻末記事

マンガでわかる
メンタルヘルスとの向き合い方

“みんなのかかりつけ医事情”大調査
安心して暮らすために知っておきたい!
愛媛県の救急医療体制の「今」

2024-2025 版

私たちの街のドクター

88名

特長や方針を徹底取材!
地域の病院紹介

- ・愛媛大学医学部附属病院
- ・四国がんセンター ・宇和島病院
- ・済生会今治病院 ・松山まどんな病院

検査・治療レポート
医療トピックス

糖尿病、不妊治療、関節リウマチ、
白内障の日帰り手術、透析治療、
インプラント治療、矯正治療

Doctors File

ドクターズ・ファイル 特別編集

遠近両用の眼内レンズでより自然な見え方に レーザー白内障手術

まずは知りたい！

レーザー白内障手術とは

目の中でレンズの役割を果たしている水晶体が白く濁り、視力が低下する白内障。視力低下が日常生活に支障を来す場合は、濁った水晶体を取り除いて人工水晶体（眼内レンズ）を埋め込み、視力の回復をめざします。保険適用の単焦点眼内レンズと自己負担を伴う遠近両用の多焦点眼内レンズがあり、近年はコンピューター制御されたレーザー装置を用いた手術も登場しています。



医療法人
はなみずき眼科

鄭 暁東 院長

関連記事 P000、000

レーザー白内障手術とはどのようなものですか？

コンピューター制御されたレーザー装置を用いて手術を行う、メスを使わない先進の治療法です。当院では安全性に配慮された白内障専用のレーザー装置を導入し、角膜切開や前囊切開、水晶体内の核の分割を高精度かつ低侵襲で行っています。従来の白内障手術では、医師が自分の手ですべての器具・機器をマニュアル操作していました。これに対してレーザー白内障手術では、コンピューター制御されたレーザー装置を用いるため正確性を追求でき、人間の手では難しい角度の切開もしやすくなっています。特に高い安定性を求められる多焦点眼内レンズを用いる場合は、有用な手術法だといえるでしょう。

手術の流れを教えてください。

まずは問診と目の精密検査を行い、白内障手術の適応があれば手術を申し込みます。濁った水晶体の代わりに入れ込む眼内レンズには単焦点と多焦点の2種類があるため、術後の見え方を説明し、患者さんのご要望に沿って眼内レンズの種類と度数を決めます。白内障手術は基本的には片目ずつ行い、手術の平均所要時間は10分程度。術前に麻酔用の目薬をさします。術後は眼帯や専用眼鏡で目を保護し、リカバールームで30分ほど休憩して血圧などに異常がなければ帰宅できます。手術の翌日、翌々日に診察を行い、1週間後、2週間後、1カ月後、3カ月後、半年後に経過観察を行います。



1. 設備が整った医療機関を選ぶことが鍵となる
2. 眼内レンズの特徴をよく理解した上で手術に臨む

Doctor's Advice

白内障手術は日々進化 自分に合う治療法を選択を

白内障は70代以上のほとんどの方がかかる身近な病気で、手術法も眼内レンズも日々進化しています。レーザー装置を用いた白内障手術はその代表的なもの。特に多焦点眼内レンズを希望する場合は医師とよく話し合しましょう。また、高価だから最適というわけではありません。その人の目に合う眼内レンズが適切なものですので、術後の見え方をイメージしておくことも大切です。

Profile

鄭 暁東院長

中国医科大学卒業、同大学大学院修了。アメリカ留学を経て2003年に日本の医師免許を取得し、愛媛大学医学部附属病院や愛媛県立中央病院、松山赤十字病院などで研鑽を積む。2012年愛媛大学眼科准教授。屈折矯正手術・眼形成手術の分野にも注力しており、先鋭の機器を用いながら手術技術の研鑽をし、後進の育成も行う。日本眼科学会眼科専門医。

はなみずき眼科 で受けられる診療

患者の視機能の回復をめざし、先進の医療技術を導入した同院。高精度の3次元光干渉断層計により前眼部の状態をリアルタイムに把握するほか、白内障手術専用のレーザー装置による精密な照射で角膜の切開・水晶体分割などを行う。さらに4K立体映像を見ながら手術を行う3Dヘッドアップサージェリーも採用。治療の緻密さに、より磨きがかかった。呼吸器や循環器に影響しにくい低濃度笑気麻酔も活用し、患者の体の負担軽減に配慮している。また、術後の見え方の維持のため、経過観察などのフォローも欠かさない。わずかな術後屈折誤差にはレーシック手術での対処も



▲3Dの立体画像を見ながら手術を実施。研修教育などにも有用だ

可能だ。「その方に合った眼内レンズをご提案するのはもちろん、多焦点レンズの強みを引き出し、安全・安心の手術の提供に努めます」と鄭院長（多焦点眼内レンズを用いた白内障手術／25万円～）。

単焦点・多焦点眼内レンズの違いを教えてください。

白内障手術で扱う眼内レンズには、単焦点と多焦点の2種類があります。従来から使われている保険適用の単焦点眼内レンズは1カ所だけにピントを合わせる眼内レンズで、最も見たい距離にピントを合わせます。例えば遠くにピントが合う単焦点眼内レンズを選んだ場合、遠くは鮮明に見えたとしても、近くを見る際には眼鏡が必要になります。一方、多焦点眼内レンズは遠近両方にピントが合うように設計されており、術後は眼鏡のいらぬ生活が期待できます。代表的なのは保険診療の単焦点眼内レンズと、選定療養の多焦点（2焦点・3焦点）眼内レンズです。技術進歩により新しいものが開発されていますが、多焦点では焦点が分散するため、単焦点と比べ鮮明度は低下する場合があります。

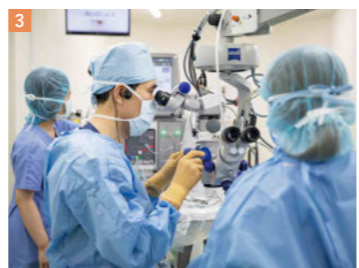
多焦点眼内レンズはどのような人が対象ですか？

単焦点または多焦点の眼内レンズの選択については、日常生活でよく使う焦点の場所や眼鏡の使用頻度、患者さんが術後にどのような「見え方」を希望しているかによって変わってきます。事前カウンセリングの段階で医師としっかり相談し、術後の見え方をきちんと理解した上で納得して治療に臨むことが大切です。術後に眼鏡そのものから解放されたいという場合は、多焦点眼内レンズを選ぶと良いでしょう。ただし、緑内障や糖尿病網膜症など、視神経や網膜に問題がある場合はピントを遠近のどちらか一方に合わせる単焦点眼内レンズをお勧めします。多焦点眼内レンズは光が分散するため、視神経や網膜に問題があるとかえって見えにくくなる可能性があるため、注意が必要です。

遠近両用の多焦点眼内レンズと
レーザー装置を用いた手術で
より自然な見え方をめざす



1 スムーズな診療が行えるよう院内動線にもこだわっている 2 チームはなみずき眼科は、最善の医療をめざす 3 先端技術を駆使し難症例や緊急手術にも対応する



4 患者一人ひとりに合った治療を提供

力を入れている 治療・検査

コンタクトレンズや眼鏡の煩わしさから解放されたい、とのニーズに応えるべく、同院では、より安全に配慮し正確性にこだわった治療を提供しようと先進のレーシック手術を導入。この手術はアメリカの宇宙飛行士やパイロットも採用時に受けることが許可されている次世代型で、まず、専用の検査機器で角膜や水晶体を精密に分析し、患者一人ひとりに合った治療プランを作成する。見え方の質にこだわったオーダーメイドの近視矯正手術は、従来よりも手術の痛みも少ないとされ、視力回復の選択肢の一つとなっている。詳しくは無料説明会にて、手術の適応、流れ、治療までの不安や疑問などに応えている。



レーシック専用手術室で屈折矯正手術が行える

※レーシック手術/両眼30万8000円(学生・特定職業従事者は別途設定あり)、オルソケラトロジー/両眼22万円〜

DATA



Tel 089-958-8822
Add 松山市古川南3-16-28
Parking 有
Closed 日/祝

	月	火	水	木	金	土	日	祝
9:00~12:00	●	●	●	●	●	●	-	-
13:00~15:00	○	○	○	○	-	-	-	-
15:00~18:00	●	○	●	○	●	-	-	-

※○手術
※土曜受付は13:00まで



Map P000 X-0 関連記事 P000、000

医療法人 はなみずき眼科 眼科

鄭 曉東 院長
Zheng Xiaodong

五藤 智子 副院長
Goto Tomoko



【左：鄭曉東院長】1991年中国医科大学卒業、同大学大学院修了。米国留学を経て日本の医師免許を取得。2012年より愛媛大学眼科准教授として後進の育成にも注力。日本眼科学会眼科専門医。【右：五藤智子副院長】円錐角膜治療を専門とし、一般眼科診療からコンタクトレンズ処方まで幅広く対応。日本眼科学会眼科専門医。

先進の機器と技術を駆使しながら オーダーメイド医療で患者に寄り添う

松山市の古川はなみずき通りにある「はなみずき眼科」は、鄭曉東院長と妻である五藤智子副院長が、夫婦二人三脚で平成25年に開業したクリニックだ。一般的な眼科診療に加え、白内障、屈折矯正、眼形成を診療の3本柱とし、幅広く対応している。

院長は「それぞれの専門性を生かした二診制で、患者さん一人ひとりの症状に合わせたオーダーメイド医療を大切にしています」と語る。大病院で研鑽を積んできた手術のスペシャリストで、難症例の白内障手術や眼瞼下垂など眼形成手術を得意とし、白内障レーザー手術を早くから導入。さらに多焦点眼内レンズを用いた白内障手術にも対応している。

副院長は、円錐角膜を専門とし、近視抑制治療の研究開発の動向に注力するほか、就寝中に裸眼視力を矯正するオルソケラトロジーなどにも応じてきた。円錐角膜とは、10代から20代にかけて急に乱視が進行し、角膜が飛び出てくる難治性疾患のこと。近視や乱視の症状に隠れて見逃されやすく、進行すると角膜移植が必要になる場合もあるそうだ。そのため、副院長は早期受診と早期発見の重要性を訴え続けている。

編集部 eyes

院長の趣味は仕事だそうで、探求心を持って日々研鑽を積んでいて、そのストイックさが熱意となって患者さんに伝わっているようです。でも仕事以外の時間は、良き父でもあるそう。お二人と

も優しい笑顔を見せながら、ゆっくりと丁寧な口調でお話ししてくださいました。患者さんの負担や不安を軽減するために、常に先進の治療法や機器などを積極的に導入されています。